

たね子の憂鬱

芥川龍之介

青空文庫

たね子は夫の先輩に当るある実業家の令嬢の結婚披露式ひろうしきの通知を貰った時、ちようど勤め先へ出かかった夫にこう熱心に話しかけた。

「あたしも出なければ悪いでしょうか？」

「それは悪いさ。」

夫はタイを結びながら、鏡の中のたね子に返事をした。もつともそれは箆笥たんすの上に立てた鏡に映っていた関係上、たね子よりもむしろたね子の眉まゆに返事をした——のに近いものだった。

「だって帝国ホテルでやるんでしょう？」

「帝国ホテル——か？」

「あら、御存ごぞんじなかつたの？」

「うん、……おい、チョツキ！」

たね子は急いでチョツキをとり上げ、もう一度この披露式の話をし出した。

「帝国ホテルじゃ洋食でしょう？」

「当り前なことを言っている。」

「それだからあたしは困ってしまう。」

「なぜ？」

「なぜって……あたしは洋食の食べかたを一度も教わったことはないんですもの。」

「誰でも教わったり何かするものか！……」

夫は上着うわぎをひっかけるが早いか、無造作むぞうさに春の中折帽なかおれぼうをかぶった。それからちよつと箆笥たんすの上の披露式の通知に目を通し「何だ、四月の十六日じゅうろくんちじゃないか？」と言った。

「そりや十六日だつて十七日じゅうしちんちだつて……」

「だからさ、まだ三日みっかもある。そのうちに稽古けいこをしろと言うんだ。」

「じゃあなた、あしたの日曜にでもきつとどこかへつれて行つて下さる！」

しかし夫は何なんとも言わずにさつさと会社へ出て行つてしまった。たね子は夫を見送りながら、ちよつと憂鬱ゆううつにならずにはいられなかつた。それは彼女の体の具合ぐあいも手伝つていたことは確かだつ

た。子供のない彼女はひとりになると、長火鉢の前の新聞をとり上げ、何かそう云う記事はないかと一々欄外へも目を通した。が、「今日の献立て」はあつても、洋食の食べかたなどと云うものはなかつた。洋食の食べかたなどと云うものは？——彼女はふと女学校の教科書にそんなことも書いてあつたように感じ、早速用ようだ筆筒んすの抽斗ひきだしから古い家政読本かせいどくほんを二冊出した。それ等の本はいつの間にか手ずれの痕あとさえ煤すすけていた。のみならずまた争あわれない過去の匂においを放はなつていた。たね子は細い膝の上たどにそれ等の本を開いたまま、どう云う小説を読む時よりも一生懸命に目次を辿たどつて行つた。

「木綿及び麻織物洗濯せんたく。ハンケチ、前掛まへか、足袋たび、食卓掛テエブル、ナ

プキン、レエス、……

「敷物。たたみ 畳、絨毯じゅうたん、リノリウム、コオクカアペト……

「台所用具。陶磁器類、硝子器類ガラス、金銀製器具……」

一冊の本に失望したたね子はもう一冊の本を検しらべ出した。

「繙ほう帯法たい。巻軸まきじく帯おび、繙ぎ帯れ巾、……

「出産。生児の衣服、産室、産具……

「収入及び支出。労銀、利り子し、企業所得……

「一家の管理。家風、主婦の心得、勤勉と節儉、交際、趣味、……

……

たね子はがっかりして本を投げ出し、大きい櫛もみの鏡きょう台だいの前まへへ髪かみを結ゆいに立たって行いった。が、洋食の食くべかただけはどうして

も気にかかつてならなかった。……

その次の午後、夫はたね子の心配を見かね、わざわざ彼女を銀座^{んざ}の裏のあるレストオランへつれて行った。たね子はテエブルに向かいながら、まずそこには彼等以外に誰もいないのに安心した。しかしこの店もはやらないのかと思うと、夫のボオナスにも影響した不景気を感じずにはいられなかった。

「気の毒だわね、こんなにお客がなくなつては。」

「常^{じょうだん}談言^{だんご}つちやいけな。こつちはお客のない時間を選^よつて来たんだ。」

それから夫はナイフやフォークをとり上げ、洋食の食べかたを教え出した。それもまた実は必ずしも確かではないのに違いなか

った。が、彼はアスパラガスに一々ナイフを入れながら、とにかくたね子を教えるのに彼の全智識を傾けていた。彼女も勿論熱心だった。しかし最後にオレンジだのバナナだのの出て来た時にはおのずからこう云う果物の値段を考えない訣わけには行ゆかなかつた。

彼等はこのレストオランをあとに銀座の裏を歩いて行つた。夫はやつと義務を果した満足を感じているらしかつた。が、たね子は心の中に何度もフォオクの使いかただのカツフェの飲みかただのと思ひ返していた。のみならず万一間違つた時には——と云う病的な不安も感じていた。銀座の裏は静かだった。アスファルトの上へ落ちた日あしもやはり静かに春めかしかつた。しかしたね子は夫の言葉に好い加減な返事を与えながら、遅れ勝ちに足を運

んでいた。……

帝国ホテルの中へはいるのは勿論彼女には始めてだった。たね子は紋もんぷく服を着た夫を前に狭い階段を登りながら、大谷石おおやいしや煉瓦れんがを用いた内部に何か無気味ぶきみに近いものを感じた。のみならず壁を伝わって走る、大きい一匹の鼠さえ感じた。感じた？——それは実際「感じた」だった。彼女は夫の袂たもとを引き、「あら、あなたは鼠が」と言った。が、夫はふり返ると、ちよつと当惑らしい表情を浮べ、「どこに？……気のせいだよ」と答えたばかりだった。

たね子は夫にこう言われなくても彼女の錯覚さつかくに気づいていた。しかし気づいていればいるだけですます彼女の神経にこだわらない訣わけには行ゆかなかった。

彼等はテエブルの隅に坐り、ナイフやフォークを動かさし出した。たね子は角つのかく隠しをかけた花嫁にも時々目を注そそいでいた。が、それよりも気がかりだったのは勿論皿の上の料理だった。彼女はパンを口へ入れるのにも体からだ中じゆうの神経の震ふるえるのを感じた。ましてナイフを落した時には途方とほうに暮れるよりほかはなかつた。けれども晩餐ばんさんは幸いにも徐ろおもむに最後に近づいて行つた。たね子は皿の上のサラダを見た時、「サラダのついたものの上に出た時には食事もおしまいになつたと思え」と云う夫の言葉を思い出した。しかしやつとひと息ついたと思うと、今度は三鞭酒シヤンパンの杯さかずきを挙げ、立ち上らなければならなかつた。それはこの晩餐の中でも最も苦しい何分かだった。彼女は怯おず怯おず椅子いすを離れ、目め八はち分ぶんに杯

をさし上げたまま、いつか背骨せぼねさえ震え出したのを感じた。

彼等はある電車の終点から細い横よこちよう町を曲つて行つた。夫はかなり酔つていらしかつた。たね子は夫の足もとに気をつけながらはしやぎ気味に何かと口を利きいたりした。そのうちに彼等は電燈の明るい「食堂」の前へ通りかかつた。そこにはシャツ一枚の男が一人「食堂」の女中とふざけながら、章魚たこさかなを肴さかなに酒を飲んでいた。それは勿論彼女の目にはちらりと見えたばかりだつた。が、彼女はこの男を、——この無精髭ぶしようひげを伸ばした男を軽蔑けいべつしない訣わけには行ゆかなかつた。同時にまた自然と彼の自由を羨うらやまない訣わけにも行かなかつた。この「食堂」を通り越した後はじきにしもた家やばかりになつた。従つてあたりも暗くなりはじめた。たね子

はこう云う夜よるの中に何か木の芽の匂におうのを感じ、いつかしみじみと彼女の生まれた田舎いなかのことを思い出していた。五十円の債券を二三枚買って「これでも不動産ふどうさん（！）が殖ふえたのだからね」などと得意になっていた母親のことも。……

次の日の朝、妙に元気のない顔をしたたね子はこう夫に話しかけた。夫はやはり鏡の前にタイを結んでいるところだった。

「あなた、けさの新聞を読んで？」

「うん。」

「本所ほんじよかどこかのお弁当屋べんとうやの娘の気違いになったと云う記事を読んで？」

「発狂なんした？ 何なんで？」

夫はチョッキへ腕を通しながら、鏡の中のたね子へ目を移した。たね子と云うよりもたね子の眉まゆへ。――

「職工か何かにキスされたからですつて。」

「そんなことくらいでも発狂するものかな。」

「そりやするわ。すると思つたわ。あたしもゆうべは怖い夢を見た。……」

「どんな夢を？——このタイはもう今年ことしぎりだね。」

「何か大へんな間違いをしてね、——何をしたのだからわからないのよ。何か大へんな間違いをして汽車の線路へとびこんだ夢なの。そこへ汽車が来たものだから、——」

「轢ひかれたと思つたら、目を醒さましたのだろう。」

夫はもう上衣うわぎをひっかけ、春の中折帽なかおれぼうをかぶっていた。が、まだ鏡に向つたまま、タイの結びかたを気にしていた。

「いいえ、轆かれてしまつてからも、夢の中ではちゃんと生きているの。ただ体は滅茶滅茶めちやめちやになつて眉毛だけ線路に残つているのだけれども、……やつぱりこの二三日洋食にさんちの食べかたばかり気にしていたせいね。」

「そうかも知れない。」

たね子は夫を見送りながら、半ば独り言なかひとごとのように話しつづけた。「もうゆうべ大きくじりしたら、あたしでも何をしたかわからないのだから。」

しかし夫は何とも言わずにさっさと会社へ出て行つてしまった。

たね子はやっとひとりになると、その日も長火鉢の前に坐り、急き須ゆうすの湯飲みについであつた、ぬるい番茶を飲むことにした。が、彼女の心もちは何か落ち着きを失つていた。彼女の前にあつた新聞は花盛りの上野うえのの写真を入っていた。彼女はぼんやりこの写真を見ながら、もう一度番茶を飲もうとした。すると番茶はいつの間にか雲母まきしらに似たあぶらを浮かせていた。しかもそれは気のせい
か、彼女の眉にそっくりだった。

「……………」

たね子は頬ほおづえ杖をついたまま、髪を結ゆう元気さえ起らずにじつと番茶ばかり眺めていた。

(昭和二年三月二十八日)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年3月24日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年2月3日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

たね子の憂鬱

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>